

2021年12月19日（日）クリスマス礼拝
聖書箇所：マタイの福音書2章1～12節
タイトル：「博士たちのクリスマス」

メリークリスマス！イエス・キリストのお誕生を、心よりお祝い申し上げます。クリスマスは、人類の救いのためにイエス・キリストがこの世に来られたことを記念する日です。新約聖書、ヨハネの福音書1章14節に、「**ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。**」とあります。「ことば」とは、イエス・キリストのことです。父なる神のひとり子であられる神が、今から二千年前に、人となられたのです。おとぎ話のようですが、本当の話です。神さまは人類にいのちのメッセージを送ってくださいましたが、それは紙に書いた文字による手紙ではなく、神のひとり子自らがこの世界に人間として誕生してくださることによって示してくださったのです。

この歴史的事実を記念するのがクリスマスです。いったいなぜキリストは人となられたのでしょうか。それは、私たち人間を罪から救うためです。聖書の中にキリストの誕生を告げ知らせた御使いのことばが出てきます。「**マリアは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです。**」（マタイ 1:20）ここに、「この方がご自分の民をその罪からお救いになる」とあります。「救い」といってもいろいろな救いがあります。金魚すくいもあればどじょう救いもある。でも、ここには「罪からお救いになる」とあります。

この世にはいろいろな問題が次から次へと出てきます。健康の問題、貧困の問題、人間関係のトラブル、仕事上の問題、家庭が抱える問題、本当に次から次に起こりますね。しかし、こうした問題の最も根本的な原因は、私たち一人一人の内側に居座っている罪なのです。そして、この罪の最終的な結末が死です。その根本原因は、神という命のルーツから離れているこの罪にあると、聖書は言うのです。キリストは私たちをこの罪から救ってくださるために人となってこの世に来てくださいました。罪を取り除く薬は、口から飲む薬ではありません。キリストがあなたの罪をご自分の身に引き受けて、十字架の上で永久に処分することによって取り除いて下さいました。

ですから、この方を受け入れるならあなたの罪も赦され、神の子どもとして新しく生まれ変わり、天国に入れていただくことができるのです。聖書にこのように書かれてあるとおりです。「**しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。**」（ヨハネ 1:12）

せっかくのクリスマスです。この機会にあなたもあなたのために人となられた救い主、イエス・キリストを、ぜひ信じて受け入れていただきたいと思います。

今日は、キリストが生まれた時、キリストを求めてはるばる東方の国からやって来た博士たちの物語から、クリスマスの意味について一緒に考えたいと思います。

I. 東方の博士たち (1)

先ほど、新約聖書、マタイの福音書2章を読んでいただきました。まず1節をご覧ください。ここには、「**イエスがヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東方の博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。**」とあります。

クリスマスのストーリーにおいて独特の存在感を示しているのが、この東の方からやって来た博士たちです。「東の方」とはペルシャ、あるいはバビロニヤという国を指しているのではないかと考えられています。また「博士」というのはギリシャ語で「マゴス」と言いますが、「マゴス」は「マジック」のもとになった言葉です。直訳すれば「魔術師」となります。当時の社会においては天文学や星占いなどを通して、人の運命や世界の情勢について占う人々のことを指していました。ですから、新共同訳ではこれを「**占星術の学者たち**」と訳しているのです。占星術、星占いの学者たちです。彼らは、星の動きを通して世界の行く末を見極める人たちでした。その彼らが救い主の誕生を星の出現を通して知ったとき、はるばる東の国からエルサレムにやって来たのです。

彼らは自分たちの国ではそれなりの立場や地位を持っていた人たちでしたが、クリスマスの舞台から見ると、神の民からは遠く離れていた異邦人たち、あるいは、その周辺の人たちにすぎませんでした。本来ならば、ユダヤの民こそが真っ先に自分たちが待ち望んでいた救い主、自分たちの王としてお生まれになった方の誕生を知るべきなのに、神の民ではなかった異邦人たちによってその大切な知らせを受け取ることになるのです。

新約聖書、ルカの福音書には、救い主キリストの誕生の知らせが真っ先に知らされたのは、野宿で夜番をしながら羊の群れを見守っていた羊飼いたちのところであったと記されていますが、この羊飼いたちもまた、ユダヤの社会では底辺にいるような人たちでした。そしてここでも、神の民から遠く離れていた異邦人、東方の博士たちが、真っ先に救い主キリスト誕生の知らせを知り、礼拝するためにやって来るという、クリスマスの不思議な出来事が見られるのです。

どれほど遠く離れていても、イエス・キリストは私たちをご自分のもとへ招いてくださる、ということです。救い主イエス・キリストを礼拝する道はだれにでも開かれているのです。それはあなたも例外ではありません。これこそが御子イエス・キリストの訪れのもつ喜びの力です。彼らは偶然のようにして救い主誕生の星を見つけたわけではありません。その星の出現をずっと待ち続けていました。彼らの仕事は人々の行く末や世界の情勢を見定め、そこで起こり得る事態を時には案じ、時には憂い、そしてそれら起こり得る出来事への対処を人々に助言することでした。他の人々よりも一歩前に世界の行く末を見つめていたのです。

それは、他の人々からすれば「博士」と呼ばれ、あるいは「学者」と呼ばれて羨ましがられるような立場であったかもしれませんが、しかしそれは同時に他の人々よりも一歩前に世界の悲惨さや悲しみを知り、他の人々よりも人一倍その憂いや悩みを心に抱くということをも意味していたのです。

だからこそ彼らは、礼拝することを求めたのです。救い主の星を待つ人、それは救いを待つ人です。暗闇が増し、人々から希望を奪い去るような出来事が続く世界の真ただ中であって、なお希望を捨てずに夜空を見上げ、天を仰いで、救い主到来を告げる星を待つ彼らに、ついにその星は姿を表し、その頭上に照り輝いたのです。あなたももし救い主、キリストを待ち望むなら、あなたの頭上にもクリスマスの星が照り輝くのです。問題は、あなたがこの救いを求めているかどうか、救い主を待ち望んでいるかどうかです。

II. 礼拝するためにやって来た博士たち(2-11)

次に、2～11節までをご覧ください。2節には、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私たちはその方の星が昇るのを見たので、礼拝するために来ました。」とあります。

彼らはエルサレムにやって来て、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。」と尋ねました。彼らは、その星が昇るのを見たので、礼拝するためにやって来たのです。ことばにすれば数行のことですが、見ることと旅立つことの間には、相当の距離、時間があつたのではないかと思います。しかし、彼らは星を見るだけでは満足しませんでした。彼らにとって決定的に大切だったことは、その星を見て、その星に導かれて旅立つことでした。そして何よりも「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」、救い主イエス・キリストに出会い、礼拝することだったのです。

一方、ヘロデ王はどうだったでしょうか。3節には、「これを聞いてヘロデは動揺した」とあります。エルサレム中の人々も同様でした。いったいなぜ彼らは動揺したのでしょうか。それは彼らの中に不安が生じたからです。ユダヤ人の王として新しい王が生まれたのというのであれば、自分たちの立場はどうなってしまうのだろう、それによって世の中が変わってしまうのではないかと思ったのです。

しかし、それだけではありません。実は、彼ら自身も気付いていなかったかも知れませんが、彼らを感じた不安というのは、もっと奥深いところにあるものでした。それは、神の御前にある自分の存在です。人間が最も恐ろしいと感じるのは、神を信じていない自分が、神の存在に触れる時に起こるものです。言い換えると、死んだら自分はどうなるのかということです。

人は死んだらどうなるのでしょうか。そんなこと死んでみないと分からないことなんだから、考えたってしょうがない。しかし、本当に神がおられるのであればこの神の御前に立つことになります。そうしたら自分はどうなってしまうのでしょうか。彼らは、そういう不安を抱いたのです。この人たちはこんなにまでして、真剣に救いを探し求めているのに、自分はこのままでいいのだろうか。そういう不安です。事実、聖書には「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように」(ヘブル 9:27)とあります。人は、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているのです。

しかし、どこまでやれば義と認められるのかわかりません。だから人は自分なりに一生懸命にボランティアをしたり、貧しい人を助けたりするわけですが、それで本当に救われているのかというと、そういう保証はどこにもありません。確信がないのです。それに比べて彼らは、その星を礼拝するためにやって来ました。その方を信じることによって、その方を礼拝することによって救われるんだとはっきり告げたのです。不安になるのも当然のことでしょう。

それでヘロデ王は民の祭司長たち、律法学者たちをみな集め、キリストはどこで生まれるのかと問いただしました。すると、ユダヤのベツレヘムであることがわかりました。預言者によってそのように書かれていたからです。

それでヘロデ王は博士たちをひそかに呼んで、彼らから、星が現れた時期について詳しく聞くと、「行って幼子について詳しく調べ、見つけたら知らせてもらいたい。私も行って拝むから」と言って、彼らをベツレヘムに送り出しました。そんな気持ちなんてこれっぽっちもないのに、「見つけたら知らせてもらいたい。

私も行って拝むから」と、あたかも自分が敬虔な者であるかのように装ったのです。形だけです。それは13節を見てもわかります。ヘロデは幼子を探し出して殺そうとしていたのですから。

しかし博士たちは、王の言ったことを聞いて出て行きました。9~11節をご覧ください。「博士たちは、王の言ったことを聞いて出て行った。すると見よ。かつて昇るのを見たあの星が、彼らの先に立って進み、ついに幼子のいるところまで来て、その上にとどまった。その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。それから家に入り、母マリアとともにいる幼子を見、ひれ伏して礼拝した。そして宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。」(9-11)

ここに礼拝する人間の姿が表されています。彼らは星を見てこの上もなく喜びました。そしてひれ伏して礼拝し、黄金、乳香、没薬を献げたのです。この「喜び」、「ひれ伏し」、「献げる」という一連の姿に、礼拝する人間の姿が表れています。礼拝とは何でしょうか。それは神の御子イエス・キリストとの出会いの喜びです。その喜びは、この上もない大いなる喜びです。彼らは幼子イエスのお姿を見る前に、その幼子を照らす星の光を見て喜んでいました。そしてついに、その星の光のもとで御子イエス・キリストと出会い、幼子を見て、ひれ伏して礼拝しました。彼らは「なんだ、貧しい赤ん坊じゃないか」と言って落胆しませんでした。「チキンが出ると思ったのに期待はずれだ」とも言いませんでした。彼らはその星を見て、この上もなく喜び、ひれ伏して礼拝すると、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げたのです。黄金は、王なるキリストにふさわしい冠です。乳香とは、神なるキリストへの芳ばしい香りです。そして没薬とは、私たちの贖い主として死なれるキリストを象徴するものでした。いずれの献げものも、まさしく神の御子、まことの王の王、私たちのための救い主イエス・キリストに献げられるもっともふさわしい贈り物でした。

この博士たちの贈り物は、ある小説のモデルになっています。ご存知の方もおられると思いますが、O. ヘンリーという人が書いた「賢者の贈り物」です。

これは、ニューヨークの片隅の、安アパートに住む、ジムとデラという、若い夫婦の物語です。

彼らは、貧しいながらも、愛し合い、助け合って、暮らしていました。とても貧乏でしたが、二人には、大切な宝物が二つありました。一つは、ジムの家に代々伝わってきた、金の懐中時計です。もう一つは、膝にまで届くほど長い、デラの自慢の髪の毛でした。

クリスマスイブの夜、二人は、愛するパートナーに、密かにプレゼントを贈ろうとしますが、何しろ貧しくて、どうにもなりません。デラは、ジムの懐中時計に付けるプラチナの鎖を、どうしても買いたいと思いました。そのために、自分

の自慢の髪の毛を、かつら屋に売って、プラチナの鎖を買いました。

一方ジムは、デラの美しい髪の毛をとかすための、櫛のセットを買いたいと思っていました。それは、デラの髪にぴったりの、宝石をちりばめた、見事な櫛でした。ジムは、その櫛を買うために、自分の懐中時計を売ってしまったのです。

ところが、その日の夜、仕事から帰ってきたジムは、髪の毛を切ってしまったデラを見て呆然とします。無くなってしまったデラの髪の毛をとかすための櫛。そして、売ってしまった懐中時計のための鎖。今や、両方とも、役に立たなくなってしまった物です。

なんとも愚かな贈り物です。バカな二人です。しかしこの小説の著者である、O. ヘンリーは、このジムとデラの夫婦こそが、「賢者」と呼ばれるに相応しい、と言っているのです。なぜなら、彼らこそクリスマスを迎える者として、最も相応しい贈り物をしたからです。

同じようにこの博士たちも、この方に最もふさわしい贈り物を献げました。ここに、私たちは異邦人の礼拝者たちの姿を通して、真実な礼拝者の姿を見ることができるのです。

あなたはご存知ですか。あなたはキリストの到来を喜んでいらっしゃいますか。なんだ、こんなものか、期待はずれだったと言ってはいませんか。あなたの救い主との出会いを喜び、この方の前にひれ伏し、この方にふさわしいささげものを献げているでしょうか。

そういえば、皆さんは“Christmas”という言葉の意味をご存知でしたか。クリスマスを英語で表記すると「Christmas」ですが、これはChrist(キリスト)、masは(ミサ、礼拝)という意味です。つまり、クリスマスとは、キリストの到来を祝う礼拝なのです。

ですから、クリスマスが本当の意味でクリスマスになるということは、キリストの誕生の事実が、私たちの生活を動かすということなのです。「キリストのご降誕が、この私のためである」ということを知って、それをこの上もなく喜び、ひれ伏し、礼拝を捧げるといふこと、自分の生き方に変化が生じることです。それは、生きた礼拝を生み出すのです。

Ⅲ. 別の道から帰って行った博士たち (12)

最後に 12 節をご覧ください。ここには「彼らは夢で、ヘロデのところへ戻らないようにと警告されたので、別の道から自分の国に帰って行った。」とあります。

これが、マタイの福音書が示す博士たちの最後の姿です。彼らは自分たちの国

へ帰って行きました。それは自分たちの住む異邦人の地です。あのいつもの日常の中へと帰って行ったのです。それは「悔い改め」を示す象徴的な姿でもありました。というのは、聖書が語る悔い改めとは、新しい歩みへの方向転換だからです。つまり、神から遠く離れたところから神のもとへと立ち返ることなのです。それが悔い改めするというのです。東方の博士たちにとっては、自分の国へ帰って行くことは主なる神から遠く離れることではなく、むしろ神のもとへ立ち返る新しい旅路であったのです。

それは、ここに「別の道から帰って行った」とありますけれども、そのことからわかります。夢の中で、ヘロデのそこへは戻らないようにと警告されていたからです。それは、もはや同じ道をたどることはしないということの意味していました。救い主イエスに出会い、ひれ伏して礼拝した彼らにとっては、そこから新しい道、主の道を生きる人生の旅路が始まることだったのです。

礼拝とは、私たちが新しくされることです。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」(Ⅱコリント 5:17)と罪の赦しの宣言を受け取って、主イエスにあって新しくされて、今日、ここから遣わされていくのです。いつもの慣れ親しんだ道も、明日からの仕事場も、学校も、家庭も、いつものあの人々との交わりも、私たちにあっては主イエス・キリストにあって新しく遣われていく場所であって、そこもまた私たちにあっての礼拝の場なのです。その道を今日、ここから歩み出していくのです。そのようにして私たちの礼拝の旅路は続き、ついには天の御国に至ります。それまでは星を見て歩み続けるのです。けれどもその時には、私たちはこの目でイエス・キリストの御顔を仰ぎ、そこで御子イエス・キリストを礼拝することになります。その日に向けての旅路を今日、ここから始めていくのです。

救いの星を探し求める人は多くいます。そしてその星について知ろうとする人、学ぼうとする人、観察し、評価する人も多いかもしれません。しかし、肝心なことはそこから先の事柄です。あそこに救いがある、あそこに希望がある、あそこに人生の意味がある。それで終わってはならないのです。それを自らのものにしなければなりません。それを自らのものとしてこそ、それが私にとっての救いとなり、私にとっての希望となり、そして、私の人生の意味となるのです。

天文学者ヨハネス・ケプラー(1571-1630)は、星が一定の法則に従って動いていることを最初に発見した人でした。彼の星の運動についての3つの法則は、宇宙旅行の基礎となっています。その彼がこう言いました。

「この発見によって、父である神のお名前が少しでもあがめられるなら、私の

名前は、永遠に忘れられてもよい。」

彼は、星の運動についての法則だけでなく、その先にある事柄、すなわち、父である神の御名があがめられることを求めたのです。それは彼がその星を造られたイエス・キリストの救いを、自分のものとしていたからです。

主イエス・キリストはこう言われます。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」(ヨハネ 14:6)と。イエス・キリストと出会うこと、イエス・キリストを受け入れること、イエス・キリストを礼拝すること。これが私たちの人生の旅路の一番の目的であり、ゴールです。その人生を自らのものとするために、私たちは「見る」から「旅立つ」へまで進まなければなりません。

今はまだ無理です、今はまだ時ではない。あれがすんでから、これに目処がついてから、あの問題を解決してから、この支度が出来てから、自分自身がもう少し落ち着いたらと、あれこれと私たちの旅路を遅らせたり、思いとどまらせたりする事柄があるでしょう。しかし、あの星を見たならば、私たちは今置かれているところから、今抱えているさまざまな重荷を置き、心によぎる思いを置いて、旅立たなければなりません。クリスマスの星、その星の輝きに導かれて、救い主イエス・キリストとの出会いに向かって進んで行こうではありませんか。あなたもイエス・キリストをあなたの罪の救い主として受け入れてください。あなたの心にもクリスマスの星が燦燦と照り輝きますように、そして、その星に導かれて人生を歩んで行かれますようにお祈りします。